

真宗寺院の社会的機能

——都市寺院の調査を中心として——

川 崎 惠 璋

一 はじめに

現代社会における寺院の問題は、社会変動によって寺檀関係や本末関係が弛緩し、その前近代性格のゆえに社会的適合性を欠如しているところに生じている。たしかに寺院組織は教祖や教義とともに、仏教の成立の重要な要素であるが、これまでの研究の傾向は教祖の信仰や人格的側面や教義に関する究明にむけられたといえる。寺院組織の究明は宗教史や宗教社会学の領域の課題として取扱われてきたが、現在の課題というより歴史的推移に焦点がおかれたり、一般的な宗教集団論のレベルで論ぜられて、かならずしも具体的な寺院組織のレベルでの究明がなされなかったきらいがある。また、寺院組織の現代性の問題は、しばしば教義の社会的順応性や近代化の問題、たとえば、「仏教の現代化」といったスローガンに解消されて、抽象性のレベルで取扱われるために、集団組織の側面が無視されたり、ややもすれば、寺院組織などは世俗的なもので宗教家の恣意性にまかされるべきであって科学的究明にたえうるものではないといった観念が支配したりした。しかし、寺院（教会）組織という宗教の下部組織こ

そは、すでにデュルケームも指摘しているように、宗教を哲学や倫理から区別する要素をなしていると同時に、じつは僧侶と一般信仰者とによって、宗教を護持する基本的要素をなしているものである。だから、この下部組織についての適確な科学的究明は、宗教の上部組織である教祖や教義の研究に先んずるものとさえいえる。このような意味において、寺院組織は教義の側面とともに究明さるべきであるが、そのさい、寺院組織の問題を教義的側面に置換することなく、それ自体一つの独立変数として研究さるべきであろう。

うえのような見地にたつて、われわれは、昭和三十三年から仏教系八大学の共同研究として仏教寺院の調査研究を断続的に行ってきたが、本報告では、これまでに整理を完了している東京・大阪・名古屋の三大都市の仏教寺院から真宗寺院に関するものを抽出して、若干の問題点にふれてみよう。この調査は質問紙による面接調査を実施し、七四四ヶ寺〔内訳、東京二八三（全寺院の17）、大阪二五八（全寺院の14）、名古屋二〇二（全寺院の17）の標本をとりあげた。調査の基本的方針としては、特定の宗派に限定することなく既成仏教寺院を研究対象とし、理論的アプローチよりも実証的な調査研究に、歴史的考察よりも現在学的究明に主眼をおいた。そして仏教寺院が現代社会においてどんな役割を果し、一般市民はどんな期待をもっているかに焦点をおき、寺院の規模などの基本的事項、寺院の経済生活、教化活動、社会活動、本末関係、地域的相互関係、寺檀関係、世襲制の問題、住職の社会的態度など多角的な質問の設定を行った。そしてこれらの項目については統計的に処理した。したがって、「真宗寺院の社会的機能」についても、超宗派的な対象から真宗寺院の関係項目を統計的に分離させたものであるから、その質的・構造的特質については推測の域をでておらず、他宗と比較して統計的に差違があるという相対的なものしかとらえられないことを断っておく。以下、現代の真宗寺院は宗教の社会的機能にみあった活動態勢にあるかどうかということに問題を限定して考察してみよう。なお、文中に示された統計数字は、とくに示していないか

ぎり「都市寺院の社会的機能」その一、その二、に示したものである。

二 真宗寺院の分布

寺院が宗教的に社会に対して機能を果たすためには、それを効果的に遂行する位置を占めていなければならない。企業体でも営業に好適な場所を選び、移転する。ところが、仏教寺院は、ほとんどが創設された場所から移転することとはまれであり、おそらくもっとも高い定着性をもっているといえるだろう。それは、歴史的伝統や檀家の固定性や大衆性の有無などによるものであるうが、社会的機能を遂行するための適正化が少しはなさるべきではなかろうか。仏教各宗寺院の分布の性格は、同時に過去におけるそれぞれの宗派の性格を示しているものといえる。真宗寺院の全国にわたる分布も、真宗各派の宗勢によってみられるように、地域的にはかなりのむらがある。本願寺派を例にとれば、寺院数の多いものをみれば大阪八四五ヶ寺、広島八三三ヶ寺、兵庫七八四ヶ寺、山口六五三ヶ寺、滋賀六〇七ヶ寺などがあげられ、少ない地域は宮崎九一ヶ寺、石川九九ヶ寺、長野一二〇ヶ寺、長崎一三一ヶ寺となっている。そして都市・農村別からみれば、農村寺院五三一八ヶ寺（総数一〇四三〇ヶ寺の五一、〇％）であり、都市の市街地に所在している寺院はわずかに一八五四ヶ寺（全体の二七、八％）にすぎない（西本願寺、未寺実体報告調査書による）。これらの数字は、真宗が全国にわたって万遍に教線をはっていず、また、大都市の人口集中にも対応していない、無策の実情を物語っている。昭和三十年東京では一、五七六、二六二世帯に対して全宗教法人数四、九二九（千世帯比三、九六）のうち真宗寺院三五三ヶ寺、大阪では五八〇、〇〇六世帯に対して全宗教法人数二、二九四（千世帯比三、九六）うち真宗寺院四九三ヶ寺、また名古屋では二八四、四四四世帯に対して全宗教法人数一、八六八（千世帯比六、五八）うち真宗寺院三二二ヶ寺となっている。大都市においても全宗教法人としてみれば、東京

では三百世帯につき一法人、大阪二百五十世帯に一法人、名古屋百五十世帯に一法人となっており、かなり濃厚な宗教的環境をつくっているといえるが、真宗寺院の数は少ない。したがって、真宗は、農村的仏教の性格を示しているとみることができる。しかし、大都市における真宗寺院の配置状況は、各区別人口比の巾およびマッピングからみれば、分散的傾向を示し、本来的に在家仏教ないしは大衆仏教の性格を顕著に示している。この傾向は、かなり高い密度をもってあらわれているが、天理教の分教会の配置に類似している。

これらの真宗寺院の分布傾向や配置の傾向は、各教団において教線拡大、寺院の統廃合など基礎的に解決すべき問題を提示していると考えられる。

三 真宗寺院の経済

戦後、寺院の重要課題の一つに寺院経済の窮迫があげられ、住職の兼業化が話題となっている。真宗寺院住職の約二〇%（本願寺派では全国で一九、一%）が教師、公務員、会社員などの兼業をもち、その半数が生活を兼業収入に全的に依存している。また、茶華道教授、勉強塾などの社会活動を東京四二・九%、大阪二三・二%名古屋二〇・九%の真宗寺院が実施して、収入源をつくっている。そして寺院の維持、教化活動についても三〇〜四〇%の寺院が法務以外の収入をこれに注入している。寺院の収入額についても、きわめて低く、本願寺派寺院で五十万以上の収入階層は、ほんの四一三ヶ寺（四、五%）にすぎない。住職の兼業化（浄土宗三一、一%、臨済宗三〇%）、や社会活動の傾向は、寺族の生活を支え、教化活動への資金調達をも意図するものであろうが、寺院経済の窮乏化は教化の面での機能障害を引き起している。さらに、兼業化や社会活動への住職のエネルギー消費は、寺院本来の教化活動を阻害することはいうまでもないことである。兼業や社会活動の拡張によらずに教化に献身することが、多くの寺院住

職の希望するところであらう。

四 附 属 施 設

戦前から幼稚園や保育所などは、寺院教化活動の延長として考えられてきたが、戦後の社会福祉三法の成立に应じて、養老院や母子寮をも含めて、寺院のこの方面での活躍が期待され、急増した事実が認められる。しかし、都市寺院の数が少ないことにもよるだろうが、その数は一〇%にもみたくない状況で、一般の期待に反しているようである（本願寺派で幼稚園、保育所、養老院、母子寮の開設件数は一〇三一〇、八%。半数以上の大都市の真宗寺院が二、〇〇〇坪以上の境内地を占有しているのであるから、この方面での活動が望ましいと思われる。ところが、さきにも指摘したように、社会活動にいたっては四〇〜二〇%も行っている状況であるから、都市寺院の傾向は、教化活動の延長としてのこれら附属施設よりも、現金収入により魅力を感じているといえないだろうか。

五 住職の社会的地位

寺院の住職は地域社会の名誉職や社会奉仕的な役職に多くついている（二〇〜三〇%）。それは僧職という社会的役割と時間に制約されない職業的性質によるものであろうが、同時に社会的地位の高さを示すものである。日本社会学会が昭和二十七年と三十年に実施した社会的階層に関する調査によれば、職業ランキングにおける住職の順位は昭和二十七年が三十種中十二位、三十年が三十二種中八位を占めており、住職の社会的地位のかんりの高さが一般的に評価されていること示している。僧侶に対する高い地位の評価は、反面仏教に対する社会的期待と反映するものであって、この点、住職の社会的役割の認識が要請さるべきであらうし、とくに、世襲制の問題と関連づけて

みると、寺院子弟に僧職者としての職業的劣等感が見受けられるが、おおいに再考する必要がある。住職の社会的地位の高さを示す客観的指標として学歴と経験年数をみれば、大学卒が半数をこえ（本願寺派五〇・五％）、全国の職業で現職者の継続年数が七・六年であるに對して、住職の在職年数は二十年をこえるものが三〇％を上廻る状況を示している。このことは、他の職業にくらべて、いかに僧職が高い知性と長い経験を必要とするものであるかを如実に示している。しかし、死亡によって交替するという自然的な代謝の様式は、ややもすれば、現住職が隋性に陥ることも考えられるのであって、職業的老化現象の危険をもっている。この点についても、制度的問題として考慮する必要がある。

六 教化活動

最近における寺院の教化活動は、マス・コミュニケーションなど一連の技術革新の影響をうけて従来の定例布教などに加えて、きわめてバラエティに富んでおり、仏青、日校、仏婦、ボーイスカウトなど組織的教化活動の充実とともに、文書伝道、視聴覚伝道、職場伝道など全く多彩な発達をとげている。教化活動は、いわば寺院活動のすべてであり、生命であるから、それだけに寺院の教化計画には多様な思わくがみられる。その成功している例としては葉書伝道が注目される。これは都市人の寸暇をとらえて宗教的雰囲気を与えるという意図をもっている。面白い。また、カウンセリングやバゼッションなどの方式も伝道のなかに導入されるならば、一層の効果があがるだろう。寺院教化は伝統的方式に固執することなく、他の分野において、その効果が確認された方式を積極的に受容する必要がある。しかし、大都市寺院にあっても、葬式や法事など儀礼的業務に忙殺されてか、約三五％（浄土宗・真言宗五〇％）、なんらの教化活動も行っていないことには注目に値しよう。教化のためには、儀礼的仏教から

脱却することが前提となる。

七 本 末 関 係

宗教団体の廃止を契機として、数多くの分派が出現し、その分派が単位になって大小さまざまな教団組織が形成されたが、真宗各派は分派活動もほとんどみられず、一応教団組織の崩壊をまぬがれた。しかし、かつてみられた強固な教団意識はみられない。一方では、本山の末寺統制は、宗教法人法の離脱や単立法人設立の条項、あるいは法人財産の独立性などによって弛緩し、教団機構の巨大化にもなって、いかにして本山を維持するかに腐心している。他方では、封建社会の地盤のなかで形成され、制度化がすすめられたために、教団の制度的存続を重視し、教団は檀信徒や一般大衆のためにあるのだという教団成立の根本的意義が転倒されて、檀信徒は教団を維持するためにあるのだという転倒された観念があつて、たがいに交錯している。この点、本末関係は一体的に統合されているとはいいたい。われわれの調査においても、本末関係が「よい」と解答したもの（二一％）より、「悪い」と解答したもの（四八、七％）はるかに多い。その具体的内容としては、「賦課金が高い」が圧倒的多く、「本末が分離している」、「教化伝導に指導性がない」、「本山は寺院経済に無関心だ」などの順にあらわれている。各本山にとつては、真宗の教義的側面から普遍された伝統的教団組織と苦難な社会的体験からえた末寺の近代意識との交錯や、それを解きほぐすことが現下の急務であり、それが近代的な組織化の過程のなかでなされるとき、新しい本末関係の統合が望まれるであろうし、そうすることが教団の社会的機能を効果的に遂行することにつながるといえる。

八 寺 檀 関 係

本末関係と同様なことが寺檀関係についてもいえるが、本末関係が同質者間の問題であるに比べれば、寺檀関係には、異質化の傾向によって一層難かしい問題が介在している。というのは、寺檀関係は世代的にうけつがれた伝統的な関係であり、家を単位とした関係であるが、社会の近代化にともなう家のもっている構造や機能が変化し、すなわち、家本位の家族から個人中心家族への変化や、伝統的家のもっていた機能の外社会への放出などによって檀家の異質化がすすみ、寺檀関係ないしはそれによって支えられていた寺院の経済的基盤に強い影響を与えているからである。もちろん、現在でも、祖先崇拜の觀念や家の宗教を慣習的にでも護持してゆこうという意識が一般市民に多少とも存在しているから、衰微しながらも寺檀関係は持続している。

しかし、伝統の隋眠に安住することなく、寺檀関係を徐々に個人の自発的信仰に支えられるような態勢に組織化しなければならない。これまでの寺檀関係のあり方では、寺院と一般市民との結びつける障害ともなりかねない。現代人が自由な宗教心の発露を求めようとしたばあいには、寺檀関係が入信の関門となつて行く手を阻むことがあるからである。積極的に門戸を開放して入信へ誘導すべきであつて、「叩けば開かれん」であつてはならない。とくに都市における一般市民の仏教や寺院に対する関心は、五十代以上の人々では、やや関心をもち肯定的態度を示しているが、三、四十代では無関心のものが多く、二十代では拒否的態度が強くなってくる。老人層にあつても積極的な態度は大きく減退している。寺院の住職も市民の宗教的関心の所在を適確に掌握し、積極的に働きかけるべきであらう。

九 おわりに

少ない枚数に多くの問題を提示しようと欲はつて羅列的にほんの要約したものになり、また龍頭蛇尾に終つてし

まいったが、寺院の現在の課題があまりにも大きく、多岐にわたるために消化しきれないことによる。うえにあげた以外に、寺院相互の地域的協力組織や住職の社会的態度にふれるべきであるが、凡長になるので割愛する。真宗寺院が、他の既成仏教寺院についても同様であるが、社会の近代化の方向と現代人の性格を科学的態度をもって考察し、伝統に固執することなく、前むきの姿勢で仏教寺院の宗教的機能を遂行する態勢を整えることを念じて筆をおく。